

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0586 ◆◆◆

20/06/03

【 両極端な6月相場、ドル/円は2ヵ月連続の小動きか!? 】

先週末に終了した5月相場は、月間変動幅2.10円。「大相場」への復権を期待していたが、結果は無残にも1月の同2.65円を下回る「今年の月間最小変動」を記録している。そんな期待外れに終わった5月相場を受けた足もと6月相場は、果たしてどう動くのか、過去の経験則を参考に以下で考えてみたい。ちなみに、パターンを振り返ると、「動くか動かないか両極端になりやすい」傾向がうかがえるものの、果たして実際のところはいったいどうなるのだろうか？

◎過去の6月は欧州・英国で重要事象が起こりやすい、今年も要注意

まずは恒例となっている月間の星取表から見てみると、6月の勝敗は1990年以降昨年までの30年間で16勝14敗だった。ほぼ互角と言ってよい内容で目立った特徴とは言えないようだ。

しかし、過去の6月相場には興味深いポイントが別途2つある。うちひとつは、「動くか動かないか、両極端になりやすい」傾向がうかがえること。「動く」事例を挙げれば、1ヶ月のあいだに13円以上も動いた1998年(高値146.75円、安値133.60円)になるだろうし、後者の「動かない」事例はと言うと月間変動率がわずかに1.80円にとどまった2011年や同1.56円の2014年が挙げられよう。また、昨2019年はランキング的には年間9位とそれなりに動いたイメージだが、6月の月間変動幅そのものはわずか2.02円にとどまっていた。

今年がどちらになるのか、正直なところ「神のみぞ知るところ」ではあるが、5月中旬から2週間程度およそ1円レンジをたどっていることを考えると、残念ながら2年連続の小動きか。「動かない6月相場」となる可能性を否定できないのかもしれない。

一方、6月相場におけるもうひとつのポイントは、「一度方向性が示されると、そのパターンが続く傾向がうかがえる」ことで、実際、2000年以降で見てみると、2008年までの9年間で8回が「5月相場と同じ方向」に動いていたのだが、それ以降、2009年以降2018年までの10年では9回が「逆方向」に動いていた。翻って、昨2019年はというと、5月と6月が実は同じ方向(ともにドル安)方向に動くという、過去10年間では「例外」とも言えるパターンだった。とは言え、逆にいうなら昨年の動きが本当に「例外」だったのか、それとも「新パターンの1年目」であったのか、どちらの展開をたどっても不思議はないだけに、動静をしっかりと見極めたいところだろう。

最後に、6月を「アニバーサリー」の観点、過去の出来事・ニュースなどで見てみると、なかなか興味深いことが幾つかうかがえる。その最たるものは「英国を含めた欧州に関し、重要な出来事が起こりやすい」ということだろう。

一例を挙げると、「欧州通貨制度・EMSを再調整(1982年)」、「デンマークでマーストリヒト条約批准を否決(1992年)」、「フランスに続きオランダもEU憲法批准せず(2005年)」、「アイルランドがリスボン条約の国民投票を否決(2008年)」、「ECBが初のマイナス金利を導入(2015年)」一などとなる。さらには、いまに至る混乱を引き起こした「英国が国民投票でEU離脱を決定」したのも6月だった(2016年)。

そんな欧州、今年についても取り巻く諸材料をみていると、何が起こっても不思議はない状況だ。事実、偶然なのか必然なのか、「英国のEU離脱にともなう移行期間を延長するか」の判断期限が6月末に訪れる」予定となっている。

ちなみに、ジョンソン英首相は移行期間の延長を否定しているものの、新型コロナの影響もあり、EUとの交渉は遅々として進んでいないことは周知のとおり。現在の市場の関心は、香港情勢を中心とした「米中の対立」に集まっている感を否めないが、実はその裏で英国あるいは欧州情勢に波乱の訪れるタイミングがジワリと近づきつつあるのかもしれない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

